

月刊反トマホーク通信

No. 37
88.11.20
定価 100円

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山502 トマ喰い虫社 ☎03(498)6095
044(63)5101



「オークランド（ニュージーランド）平和船団がシドニーにやってくる」（現地平和団体のリーフレットより）

〔特集〕 第10回 反トマホーク運動全国会議

もっとでてこい トマ喰い虫

アジア太平洋の非核化・自立の運動とともに
トマホーク艦母港撤回、核艦船寄港禁止を人々の手で！

1989年こそ米韓合同演習

（チームスピリット）を止めよう！

トマホークの配備を許すな！全国運動

●維持会員（月間会費）

団体 1口 2000円
個人 1口 1000円

●参加会員（月間会費）

団体 1口 1000円
個人 1口 500円

●通信会員

年間 1口
2000円

あなたも仲間にも！（会費は本誌購読料を含みます）

もってこいで食べていこう トマホーク食虫

第10回
全国会議の
報告です



湯浅一郎
(トマホークの配備を
許すな! 呉市民の会)



五年前に始まった全国会議はとうとう十回目を数えた。この間、横須賀、佐世保など軍港での闘いを中心に各地の固有性に根ざした運動を積み上げてきた。その一つ一つは各地の闘いとして何らかの必然性と歴史的意義をもつものだったと思う。

しかし残念ながら五年前と比べ日本をめぐる核状況は悪化こそすれ、良くはなっていない。八十五年十月、攻撃型原潜ヒューストンの横須賀入港で始まったトマホーク艦の日本寄港は、八十六年八月戦艦ニュージャーシー水上打撃団の三大軍港への同時寄港をへて、ついに今年決定的な段階を迎えた。世界初のトマホーク艦の海外配備が日本で強行され、私たちも含めて民衆はその選択をくいとめることはできなかった。

今回の全国会議は、発足以来最大の節目を迎え、困難な状況の中で私たちはどこへ行くのかを再度検討しなおす場としてあった。

十一月四日夜から六日昼まで生活クラブ生協町田センターで開かれた会議には地元神奈川、首都圏に加え、鹿児島、熊本、佐世保、呉、京都、名古屋などから五十人が参加し、熱の入った議論が展開された。

まず前回の呉での全国会議(八十七年七月)後、最大のテーマであったファイブ、バンカーヒル母港化阻止の闘いについて、横須賀・神奈川・佐世保・九州および呉・広島から報告された。その後、討議の前提となる問題提起が「反トマ運動の現状と今後」(田巻一彦氏)、「日本の反核・反基地運動の課題」(前田哲男氏)そして「韓国の反核運動」(徐東晩氏)と行われ、それらをふまえた自由討論をへて、全国運動としての運動・運営の方針について、夜おそくまで議論が続いた。その夜の交流会は、例によって様々な出会いや発見があったものと確信する。六日の午前中は眠い目をこすりながら今後

の運動について時間ぎりぎりまで議論が続いた。運動の方針に関する共通の意識は、ファイブ、バンカーヒル反対闘争の中で各地でぶつかった壁を越えるために運動をどう建て直し状況を逆転させるかにあった。

横須賀の報告で新倉さんは、自治体をゆさぶれば、ゆさぶったなりのものは何かでてくるといわれた。それは確かだと思う。が、長崎市長が平和宣言で「政府は主体性をもって核の有無を検証せよ」とうたいあげ、これを受けて長洲神奈川県知事が強い姿勢で政府に不満と抗議の声をうちだしたにもかかわらず、外務省の見解は微動だになかった。

また八月末、「国は自らの手で非核三原則が守られていることを、より明らかに理解しやすい方法を講じて」と政府に迫った佐世保市長も、その後自民党市議団の問い詰めで「核疑惑があるのは一部の市民だけ」などとゆりもどしがきており、似たような問題は広島県や長崎市でも起きている。各地の住民と国政の狭間で自治体が揺れ動いているわけで、国政レベルでも通じる世論づくりが運動のポイントになることが改めて浮上した。

全国運動といっても八十四年のトマホーク配備直前をのぞけば、首都圏から九州までの太平洋岸が中心で、全国的な世論を作るにはさらに各地に運動の点をいくつもつくること

が必要だろう。新たな動きを見せる全国の基地に対する闘いと連携も必要である。これらの問題意識に沿って運動の課題、アプローチや行動計画が大略次のようにまとめられた。

「運動方針」

●前提

私たちはアジア太平洋の非核化、自立の運動とともに歩む。とりわけ北西太平洋の軍拡とそれに連動する日本の軍拡に反対する運動を強める。

●課題

- (1) トマホーク艦の母港化を撤回させ、核艦船の日本寄港を禁止する。
- (2) 「韓国の非核化」に連動する反核・反基地運動を作る。
- (3) 日本周辺で戦争の引き金をひく潜水艦戦争(A.S.W)体制(通信基地、軍港、飛行場)をこわす。

●アプローチ

すべての課題の追求において次のアプローチを心がける。
(1) 自治体および地方議会への世論を強め

る。

- (2) 海のチェルノブイリ(軍艦の核事故)への関心を高める。
- (3) 日本の軍拡全体への関心を高める。
- (4) 国際的世論の形成と共同闘争を強める。
- (5) 反核・反基地運動の文化、行動的イメージをつくり出す。

●行動プログラム

- (1) 核艦船寄港禁止、トマホーク艦母港撤回の国民的運動をつくる(非核三原則の二・五原則化をえうつ)。
- * 核艦船寄港地への行脚や働きかけ。とくに鹿児島、別府、福岡、舞鶴、下田、函館小樽。
- * 世論を広げるためのアピールを用意する。
- * 長崎市長の平和宣言の非核検証の訴えをすべての非核自治体に支持するよう求める。
- * 世論を動かすためのメディアづくり(「核事故」「太平洋演習と基地」「潜水艦戦



争)など)

(2) 平和船団を広げよう。海に出よう。

(3) 太平洋演習(八十九年九月)を止めよう。

* チームスピリット89中止要求のハガキ運動を今すぐ始める。

* 前記(1)と連携させる。

* 潜水艦戦争の危険性を訴える。

* 太平洋規模の反対運動を呼びかける。まずは情報収集。

* 海の軍備撤廃のための国際行動ウィーク(八十五年五月二十六日〜六月四日)の中心テーマとする。

* 八月広島、長崎のテーマに。

* 抗議船を出す。今からプランニングする。

(4) 反核ホットラインの強化。非核コードのアップ・デート。

(5) 出版プログラム

* 反トマ通信 * 新たなシリーズ出版物(トマ喰い虫解説など) * 基地ファクト・シート * 絵本など

●運営方針

分散型ネットワークにふさわしい運営の方式を試みる。

(1) 全国会議、運営委員会、電話相談の基本構造は維持する。

(2) 仕事別のコーディネーター(連絡調整役)を置く。

運営コーディネーター/運動コーディネーター/情報コーディネーター/反核ホットライン/コーディネーター/国際コーディネーター/反トマ通信編集長

(3) 名前を改めようかという提案があり、時間をかけて運営委員会などで継続討論することになった。

* 改名案 「核と基地のないアジア・太平洋をー日本ネットワーク」

敵の攻勢は私たちにあって絶好のチャンスであるという構造は変わらない。トマホーク艦の各地の港への寄港は、その町に運動をつくるインパクトになるだろう。それを一環とした北西太平洋の全ての基地群をつなぐ太平洋演習をめぐる闘いは私たちに新たな飛躍を要請している。この全国会議を機に心機一転、トマ喰い虫のさらなる増殖を各地で推進しよう。

平和船団編成し 核艦船寄港阻止

市民グループ方針
核ミサイル搭載可能な艦船の日本への寄港や基地化に反対する市民グループ「トマホーク」の配属を許さず全国連帯的な運動方針を決めた。

【動】(熊本県代表)は五、六の両日、東京市東区生活クラブ町田センターで第十回全開会議を開き、ゴムボート百隻からなる平和船団を編成し、搭載可能な艦船の日本寄港を阻止するなどの具体作戦などを決めた。

★その他

従来どおりトマ喰い虫社へ

呉市阿賀中央五〇一四〇 湯浅一郎

〇〇八三三(七三)四六六〇

★運動についての情報、切り抜き 機関紙など

佐世保市比良町七一一〇 佐々木竹一

〇〇九五六(二三)八五八一

★軍艦の寄港に関する情報、切り抜き

千六〇二 京都市西陣郵便局私書箱八一号

反軍フォーラム

〇〇七五(七一)八三五六(青木)

★軍拡、基地の動きなど体制側の動向に関する情報、切り抜き

仕事別コーディネーターができることによって、郵送先を次のようにします。御協力下さい。

参加者の胸のつらさ

「こころ」が大きな動きの源になって欲しい

山中悦子(生活クラブ生協神奈川)

何事も、初めてと言うのは、期待と共に不安も意外大きいものです。「反トマ」は自分の心の中に長い間暖めてきたテーマではありましたが、ごく最近に至るまで行動が伴わなっていたにもかかわらず、今回の「全国会議」出席という私の初体験は、緊張とともに始まりました。会場が生活クラブ町田センターということでは、私自身の活動の生活クラブ(神奈川)ということもあって幸運でしたが、また、全国会議の案内の表紙に掲載されていた写真も、この夏の私の行動と重なっていて、会議出席の資格を得られたような気がして勇気が出ました。

参加前プログラムを見て私が特に関心を持ったのは、五日午後の問題提起のところ、中でも「日本の反核・反基地運動の課題」(前田哲男・軍事評論家)と「韓国の反核運動」(徐東晩・現代史研究会)でした。反トマ運動一年生としては、とにかく現実

を知りたい、それにはまず勉強というところからです。また今、様々な場で、核のコト、平和のコトを考えたり話したりすれば必ず至るのが韓国の問題ということもわかってきました。八月六日に広島で持たれた草の根集会のテーマも「いまアジアの民衆と向きあおう」朝鮮半島の平和的統一と非核の太平洋をめざして」でした。

会議は、受付で沢山の資料を手にとることから始まりました。資料には全国各地の日々の運動が集約されていて、その実践の重みが生きています。私の関わった「県民運動」のものを開くと、ヨコスカにファイフとバンカーヒルが配備された、あの八月三十一日の朝のことが昨日のことのようによみがえり、今更ながら残念で、あらためて今後の運動の取り組みに向けてのファイブを確認しました。各地からの報告、そしてビデオやスライドで紹介されるシドニーの様子を見



会場にはミニ講演「ヨコスカ」のコーナーも。オーストラリア平和船団をよこせ、沢山のビデオも上映された。

る中で、私は、一刻も早くこれからのことを話し合いたい気持ちをつのらせていきました。今までの各地での地道な様々な運動に敬意を表するとともに、一日も早くどうして目的を果たすために私たちは早急に今何をしなければならぬのか、より具体的に話し合いたいと思っていました。

ここで今後の運動方針が確認されましたが、アプローチとして「日本の軍拡全体への関心を高める」、行動プログラムとして「大きく世論を動かすようなメディアづくり」という点に特に共鳴しました。危機感を共有できる人達を一人でも多くふやさなければ大きな動きを生み出すことはむずかしいと思うからで

今回の演習は太平洋軍司令官自ら、平時では初めて指揮を取るといふ、全面核戦争さながらの力の入れ様だが、降って湧いた様な突然の思い付きではない。70年代には想像もできなかったこの大演習は、80年代

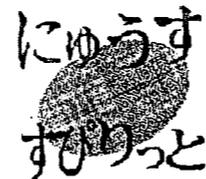
日米共同演習とフリーテクス

(米海軍大演習)が合流

「対ソ全面対決を想定」(「産経」)としていふことと合わせて、極東のNATO化がいよいよ現実のものになる。

史上初の日米韓三軍統合演習

来年9月から10月にかけて、米太平洋軍が、オホーツク海を含む極東全域で、史上最大の軍事演習を行うことを非公式に明らかにした(「産経新聞」88年10月16日)。



第一回

来秋空前の太平洋演習に日本参加

最大の「タブー」破る歴史的な選択

全国運動情報コーディネーター 青木雅彦(京都市)

を通じてこの地域で米軍が行ってきた軍事行動の総仕上げの性格が濃厚だ。

80年代を特徴付ける軍事行動の第一が、日米共同演習。安保条約に「魂」を入れた「日米防衛協力指針(ガイドライン)」が78年11月にまとまって以来、日米共同演習が本格的に始まり、早くも86年10月に初の三軍統合演習「キーンエッジ」が実施されるに至った。しかし、建前として「日本単独有事」を想定した日米演習では現実的でない。同盟国の役割分担を明確にした統合演習へと、日米共同演習を拡大するのが米軍の狙いである。

第二の80年代型演習が、82年から始まった米海軍の、空母機動部隊を中心とする、ソ連基地の目の前での示威行動(フリーテクスと命名されることが多い)。84年には、戦後最大の五個の空母機動部隊を動かし、ウラジオストックの目と鼻の先で挑発。86年には佐世保に寄港した戦艦ニュージャーシなどが、オホーツク海に殴り込み。今年にはソウル五輪「警戒」と称して日本海で演習を行った(海自も史上最大規模でこれに参加)。

欧州と違い、極東ではソ連との対決の主戦

最早財テクで頭が一杯の政治家には頼れない。国民自らがこの演習の意味を考え決断するときは、(一九八八年十一月十八日記)

「ソ連渡る」か、日本政府

この演習こそが米軍の本音であり、実戦のシナリオに近いものであることは素人でも解るが、日本にせよ、韓国にせよ、これまでの「国防政策」の建前を大きくはずれるものであることは明らかだ。その日本政府だが、この演習に関して、防衛庁筋は「日本有事以外を想定した演習目的では集団的自衛権に触れる」ので、「太平洋演習の一環として日本有事に限定した日米共同演習として参加する」(「日経」10月31日)という。しかし制服サイドは「積極的に検討する」と言っており(10月20日共同通信)、要するに例のごとく、演習実体を言葉の上でこまかして参加する意向なのである。ここには演習の意味を真剣に検討したり、国民に対してそれを説明しようという意志は微塵もない。

「ソ連渡る」か、日本政府

海。核ミサイル搭載の戦略原潜を巡る戦いになる。しかし海で始まった核戦争は「必ずしも海洋に限定されるわけではない」(84米国防指針)。従って「抑止」を完璧なものにするためには、アメリカの挑発的な「海洋戦略」に、最前線基地である日本列島と朝鮮半島にいる同盟国の軍隊の参加が要請されることは「当然」だった。



いま一度の発言

足立修行(トマホーク阻止京都連絡会)

その手段(方法)に好き嫌いは確かにあるでしょうが、まず興味を持ってもらわなければその先の話は出来ないのです。「海のチェルノブイリ」という表現があってもよいと思いました。運動のための運動ではなく、目的

を果たすための運動であるはずなので、ここが大きな動きの源になって欲しいと切実に祈りながら、自らの責任をどう果たしていくかを課題に抱え会場を後にしました。 ※ちよっぴり頭が大きくなり過ぎて疲れました。

全国会議には二回目の参加だが、各地の志を同じくする人たちが意見を交わしあい運動の認識や行動を共有して、状況を打ち破る大きな力を生みだそうとするこの会議は、今後ますますその重要性を増してくると思う。

会議に出されたいずれの報告や提起も、またそれらを受けての討議も、たがいを触発しあうものがあり、私にとっても大いに収穫があった。ことに徐東晩(ソ・トンマン)さんによる韓国における反核運動の具体的報告は貴重だった。本誌に概要が掲載されることを期待している。

今回の会議には、これからへ向けての新たな運動、運営方針が提出され合意されたのだが、一連の討議を通じて、反核・反基地という形に集約されてきた反安保の運動が必ずし

も安保から見えないはずの日本の全体像を視野に納めきれないのではないか、という多少の懸念も感じた。会議の席でも幾人かからそのことに関わる発言があったのだが、今一度誌上で発言したい。主題は、私たちにどうして反核・反基地の運動は何と闘い何をめざしているのか、という一点に絞られる。その共有の過程こそが、運動に深まりと広がりをもたらさずだろうと思う。

世界でそこに生きる民衆の解放を阻み生活と生命を奪うことで自国の繁栄が約束されるという根底的歪みの上に、日本は立っている。そのことは、私たちがまた自分の生が破壊されて在ることを意味する。そのような死の風景を私たち民衆の力で生の風景に作り変えること、これが反核・反基地運動のめざすもの

のはずだ。戦後日本を規定してきた基本的政治選択の基軸に安保が存在し、その軍事的表象として核と基地の恐るべき現状がある。その政治選択を民衆のがわから変えようとする時、私たちには私たちの望む生の風景を構想し、そこに立って闘うことが要求される。オルタナティブとは、そのことを示すことばだ。さしあたっての最大の照準として安保があるものであって、少なくともそこから見えてくる全体像を射程に収めた反核・反基地でなければ、私たちの運動が生る風景への構想を紡ぎだすことは不可能だろうと思う。

韓国の非核化に連動しようというテーマにこめられるべき認識も、日米韓軍事体制下で韓国の核も日本の核と同様極東の安全を損なうから、共同で行動しようということ以前に、まず核のプレゼンスに端的に表れているそのような体制が朝鮮半島の統一を妨げるものとしてある以上、日本の運動はそれを少しでもうち崩すことで韓国民衆の反核運動に連ならねばならないということではあるはずだ。いわずもがなであったかもしれないこの十分な発言について、読者の方々のご意見を聞かせていただけたならうれしい。

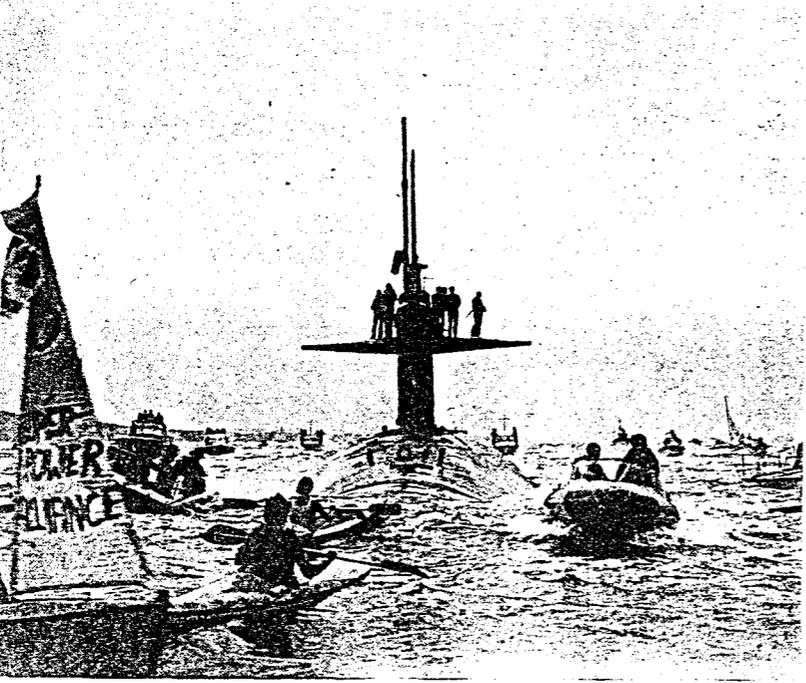
最後に、今回の会議の説話を担当された首都圏の方々、ご苦勞さまでした。今後とも、ともに力を合わせましょう。

一九七六年からは、核艦船寄港に反対する「平和船団」が組織されるようになる。オーランド港ではじまったこの運動はあつといふ間に各地に飛火し、アメリカやイギリスの核艦船の乗組員たちは、ニュージーランドのどの港にいつ入ろうと、雲霞のように自分たちの船のまわりに集まってくるヨットやカヌー・サーフボート、時には潜水艦のへさきにまでたのぼってくる救命胴衣をつけた傍若無人な男たちに当惑させられるようになった。

民衆の平和運動が国政レベルへ

続くフランスの大気圏内核実験に抗議して、グリーンピースやCNDなどの平和団体が実験場に船を送るようになった。ニュージーランドの時の労働党政府は、オーストラリア政府とともにフランスを国際司法裁判所に訴え、さらに海軍のフリーゲート艦に關係の一人を乗りこませ、モルロア環礁に派遣するということさえ行なった。これらの直接行動と国際世論の高まりにより、さしものフランスも地下核実験に切りかえざるをえなくなったのである。

米核艦船ハッドウを迎える平和船団(1979)



●ニュージーランド出前します
各種資料、ピースグッズ、ピースチョコなどを持って、学習会や集会に出向きます。連絡は、〇四五(四九一)三一四八、または千二二一 横浜市神奈川区二本榎五 高橋方まで返信用切手同封でどうぞ。

ド九〇万、ウェリントン三五万の人口からするとこれは大変な数である。また国のすみずみにまで非核宣言地帯が広がっていった。そこに住む人々の比率は、一九八三年の二八%から、八七年の七二%へと驚異的な伸びを示した。この記録は世界一で、いまだにどの国にも破られていない。

かくして、八四年の総選挙で労働党が核艦船拒否、国の非核化を公約に掲げ、政権党である国民党との争点を明確に打ち出したとき、それは民衆と平和運動が長年積み重ねてきたものの国政レベルへの伸長にほかならなかつた。周知のとおり、労働党はこの選挙で大勝したのである。(つづく)

非核の国ニュージーランドの 草の根平和運動(3)

山田紀子

私がニュージーランドを「一年間の逃避先」に選んだきっかけは、ともかくにもそこが「核のない国」だったからにはかならない。しかしもうひとつの動機として、ではなぜニュージーランドは非核国になりえたのか(なぜわが国はそうなりえていないのか)、またそれはどのようにして実現したのか、といったことを、できれば探りたいと思ったこともあった。一年間のいろいろな見聞からその点をまとめてみると、次のようになる。

根生いの独立・パイオニア精神

まず、ニュージーランドを取り囲む条件の良さがある。これは、ニュージーランドが南半球の「離れ小島」で、他国の軍事的・政治的影響から比較的独立しうる地政学的位置に

あることが大きい。アンザス条約でアメリカ・オーストラリアと軍事的に結ばれ、歴代保守党が「ソ連脅威論」をふりまいてきたとはいえ、ニュージーランド人は実感としてそれほど「外からの脅威」を感じてはいない。食糧の自給自足が完全にできるといふ最低限の安心の保証も、そのような政治的立場を選択するときの一要素となる。

また人口三二〇万人という、民主主義の「適正規模」ともいべき国の大きさがあげられる。顔の見える関係、政治と生活がともかく近いのだ。これに加えて、世界ではじめて婦人参政権を勝ちとり(一九九三年)、旧世界の階級社会を脱して、できうるかぎり平等公平な社会を創ろうと努めてきたニュージーランドの歴史がある。パイオニア精神と草の根民主主義は、この国の根生いのものなのだ。

次々に平和運動の波が

このような歴史的・社会的条件に加え、平和運動自体のユニークなありようが特筆されるべきだろう。その徹底した「草の根性」「非組織性」については前号で紹介したが、その歴史も実に興味深いものである。

ニュージーランドの反核運動は、すでに一九六〇年代初頭、「赤道の南に核はいらない」をスローガンとする、先駆的な「南半球非核地帯化構想」に始まっていた。一九六八年に起こったオメガ基地反対運動はベトナム反戦運動を上回る規模でたたかわれ、結局この基地を閉鎖に追い込むことになった。一九七一年からは、モルロア環礁での引き



会計報告

(88.10.25 ~ 11.16)

[収入]

○前月からの繰越	△650,281
内訳	
経常繰越	△284,281
借入金繰越	△376,000
○会費収入	136,000
内訳	
維持団体	48,000
維持個人	50,000
参加団体	0
参加個人	6,000
通信会員	32,000
○カンパ収入	67,065
○在庫品売り上げ	1,700
○反核ホットライン売り上げ	9,600

<計> △445,916

[支出]

●家賃 (11月分)	40,000
●光熱費	3,648
●電話代	12,441
●郵送費	33,150
●文具費	1,380
●印刷費	66,000
●反核ホットライン経費	15,380
●郵便振替手数料	1,300
●次月への繰越	△619,215

内訳	
経常繰越	△243,215
借入金繰越	△376,000

<計> △445,916

皆さんからの会費とカンパによって、何とか毎月の会計を維持することができていますが、何分大きな借金を抱えている状態です。そろそろまた、年末カンパのことをお考えいただけると幸いです。

皆様お元気のことと思います。昨日、テレビのニュースでファイフ、パンカーヒルの入港の様子を見て、いよいよ本当の闘いが始まるのだな、と思いました。そこで早速提案なのですが、北海道の反原発訴訟を手本として、全国運動としても日本政府を相手どって訴訟を起こしてはどうか。もちろん、協力できるすべての仲

読者から

間と連帯して。憲法の生存権を盾にとれば、このような法廷闘争も可能なのではないかと思います。もつとも、門前払いを食らう可能性は大ですが、それでもPR効果はあると思われ。また、万一法廷での論争が可能になったら、裁判の一次的な勝敗は別として原理的に我々の主張の正当性を示すことができるでしょう。財政上その他の困難はあると思いますが、もしこのようなやり方にも可能性があるとしたら、私も最大限の協力をしたいと思います。

以上、すでに皆さんの中で論議されてしま

っている問題かもしれませんが、一応ご検討の種にして下さればありがたいと思います。敬具。

(八八・九・一 神奈川 K・J)



反核ホット ライン

だより

入港情報

10・16	11・11	21
P級II (原子力潜水艦パーム級)		
S級II (原子力潜水艦スタージョン級)		
L級II (原子力潜水艦ロサンゼルス級)		
10・21	11・21	
ウイリアム・H・ベイツ (S級)	ガードフィッシュ (P級)	
午後3時 横須賀に入港	午後 横須賀を出港	
10・22	11・10	
バッファロー (L級)	バッファロー (L級)	
午後2時 横須賀に入港	正午 横須賀を出港	
10・24	11・12	
ウイリアム・H・ベイツ (P級)	バッファロー (L級)	
午前10時 横須賀を出港	午前10時 横須賀に入港し、正午に出港	
10・31	11・4	
バッファロー (L級)	バッファロー (L級)	
午前10時 横須賀を出港	午後2時 横須賀に入港	

*11月21日現在で各港への原子力艦の入港回数は、

横須賀 24回(うち原潜24回)
佐世保 6回(うち原潜6回)
ホワイトビーチ 11回(うち原潜11回)
計 41回(うち原潜41回)

*昨年暮れ米・ソ間で調印された「INF全廃条約」は、今年になって両国の批准も終わり緊張緩和の道が開けようとしている。しかし「INF全廃条約」の枠外となった海上・海中発射の核トマホーク(巡航ミサイル)は日本への配備が加速し原子力潜水艦の日本寄港が増加している。

今年11月12日横須賀に入港した原子力潜水艦バッファローが41回目となり1986・87年の41回と同数になった。このままでは過去最高の寄港回数を突破して、まったく嬉しくない新記録を更新してしまいそうである。こころでなんとかしたいものである。私たちの力で。

*ホットライン会員の皆さんへ
反核ホットラインは、トマホーク搭載艦が入港した際に会員の皆さんに電話を通じてその情報を流していますが、電話を2回かけても本人が留守の時は連絡が通じませんのであしからずホットラインの会員も募集していますのでぜひ参加してください(会費2000円)。またハガキもありますのでご注文ください。

原子力艦入港情報 テレホンサービス

ブッシュホンで、まず 井8301、そして連絡番号 968・1071、次に暗号番号 1071

だれでもどいでもできる

デイビス・レポートの広め方

③

地域で活躍している自治体の議員さんをご存知ですか? もしそういう人が身近にいれば、デイビス・レポートのことを話して議会で取り上げてもらったり、議会資料として購入してもらうことも可能です。

核事故をアセスメントする会では、全国革新議員会議の議員に働きかけ、目黒区(東京)・上福岡市・大宮市(埼玉)・流山市・佐倉市・白井町(千葉)・逗子市(神奈川県)・豊田市(愛知)・佐賀市などの自治体の議員にデイビス・レポートを買ってもらっています。ぜひあなたのお知り合いの議員にこのレポートを勧めてみてください。普及グッズなどのお問合わせは、

〒一五〇 東京都渋谷区渋谷二一五一九
バル青山五〇二 核事故をアセスメントする会
☎〇三(四九八)六〇九五

* * *
おかげさまでデイビス・レポートは、これまで千部近くを普及することができました。

科学的かつ衝撃的な内容が広い反響を呼んだことも確かですが、このような大部な専門書が短期間にここまで広がったこと自体、あまり例のないことです。会としてもさまざまに普及の努力をしましたが、基本的には、人から人へ、一部ずつじわじわと広がってこまごまと来たという感じがしています。財政的にもなんとか赤字を出さない展望が見えてきましたが、今後もう一まわりの普及の努力を、皆さんがたにもお願いしたいと思います。どうぞよろしく願います。



編集後記

三日、三月、三年。または「三号雑誌」なんていいますが、反トマ通信もこれで満三年となりました。バックナンバーの綴りをくりながら、「そうか三年か、そうかよしよし」などとうなづきあった編集スタッフ×名、それではと祝杯をあげに町へ消えていくかというところ、そうではなくて今夜もうなだれて机にむかうのであります。

これからは各地で編集をまわりもちにしようなどという楽しい話も出た全国会議。この「通信」をもっと魅力的なものにするために、これからも無い知恵を絞りつづけます。よろしくシッタ、ゲキレイ、お便りを!

(編集部一同)

月刊反トマホーク通信 第二十七号

一九八八年十一月 十日発行(通巻二十八号)

*発行 トマホークの配備を許すな! 全国運動
〒一五〇 東京都渋谷区渋谷二一五一九
バル青山五〇二 トマ喰い虫社
☎〇三(四九八)六〇九五
〇四四(六三)五一〇一

*編集 反トマホーク通信編集委員会
*定価 一〇〇円(通信会員年間一〇〇〇円)